

## 島原・天草一揆余話

太田 哲朗

### 三會村一揆衆 松倉藩に抵抗 原城攻防戦の前 すでに藩兵とゲリラ戦を始めていた

一、南高来郡三會村(現島原市)は、島原城の北隣にある地方で土地の人達は北目と言う。古くから城下町を境に有明海に面した北部を北目、南部を南目と言い慣わしていた。そもそも天草の乱の発端は南目の有馬から起こり、主戦場になったのは南有馬の原城である。従って私たちの目は南目にむけがちであり、北目には一揆勢はいなかった。と、私は思いこんでいた。

この思いこみを覆すようなことが「寛永平塞録」に書かれていたので、今回はそのいくつかを紹介する事にした。ただしこれには、伝曰と注釈がついているので伝聞によれば、という意味であろう。

・寛永十四年(一六三七)十一月十一日、年貢米を収めていた北目の三會村の米倉から、城中の侍を含め四百人の手勢が、七〇〇俵を城中へ運び込んだ。同日また同じ三會村・杉谷の倉からも武装した手勢四百人が押しかけ、米一〇斛を運んでいる。この動きを一揆衆は見ているがじつと静観していた。さては、こちらの物々しさに怖じ気づいたかと、安心してしまった藩兵達は、翌日も残った米を残らず運び込もうと、杉谷倉へ城の手勢四〇〇人を繰り出した。



現在の原城

この時、頃合いを見計らって一揆勢が急襲、四方から鉄砲を撃ちかけた。城の手勢は必死で防戦に努めたが、侍五人が討死し、残る者は武器を脱ぎ捨て、馬具

を置き去りにして、裸で城へ逃げ帰った。一揆勢は残された武器や馬具を拾い、米もことごとく奪い取っている。

・その後、期日は定かでないが、城中へ密かに忍び込んだ一揆勢の百姓衆が、鉄砲の玉薬(火薬)を盗み出し、城の石火矢(大砲)の狭間から落としてしまった。ことがばれて、城では一揆勢の百姓二〇〇人を召取り打ち首にし、更に獄門にさらしている。

幕府鎮圧軍の総指揮官・板倉内膳守重昌が、原城の総攻撃を強行したのは翌寛永十五年一月元旦で、重昌はこの時、原城で戦死している。三會村一揆勢のゲリラ戦は、これより約一カ月半前のできごとである。

もとより三會村について「一揆村」と、「平塞録」は、この村を決めてけている。

「島原の歴史・藩制編」という郷土史の中から、三會村二六二六人中一四二四人が一揆に参加した、という数字を見出すことができる。島原城お膝元の城下町に一揆勢がいたわけではないが、城下町周辺の千本木から杉谷、三會村にかけては一揆勢の拠点があったのではないかと、私は想像する。

二、島原城資料館の専門員で郷土史家でもあられる松尾卓次氏から「北目では三會村が一揆勢の北限でしよう」というご教示をいただいた。さらに、「平塞録」に記されているような、三會村の出来事については、「島原藩の史料からも裏づけられるものがあります。」とのことだった。いつか機会があれば、島原市の松平文庫や、資料館を訪れてみたいものだと思っている。

### 風信

○六月十五日・午前十一時より長崎清水寺秘佛十一面観世音菩薩の御開帳の式典があった。今回の特別御開帳は、平成十六年以來すすめられてきた文化財指定の本堂及び周辺の保存整備完成の式典が行われたからである。秘佛の御本尊は元和九年(一六二二)本寺の開山慶順上人が京都清水寺光乘院より拝受され長崎に護持されたものと伝え、また本寺の本堂は国宝崇福寺建立に多大の協力を行った何高財父子が寛文六年(一六六八)の造営に参加した事もある。本堂の様式には明末清初黄檗天竺様式と称されている技法や中国の建材(広葉杉)が使用される等、国宝崇福寺建造物を思わせるものが多々見つかったそうである。

○七月二日(金)「長崎県立図書館改装新設の企画がある」というので、大村市より「新設の県立図書館は是非大村市へ」との意見書が大村市より長崎県に提出されたと情報があり、本会では宮川雅一理事や国文協田中副会長を中心に「長崎県立図書館の県都での再整備を考える会」の会合があり三十数団体の代表者が集まってこられた。

○八月に入ると長崎の行事は多忙である。八月一日はお盆の入りで初盆の家は此の日より門提灯を軒に下げる。九日は原爆忌。十三日より盆供養。十五日精霊流し。十六日は地獄の釜の蓋があき、光源寺「あめやの幽霊」が出てこられる。

○長崎日本ポルトガル協会より日ボ修好一五〇周年記念として帆船ザグレス号が八月三日入港・五く七日は一般公開する予定であるので御出かけ下さいとの事。

○今月は次の本の御寄贈をうけました。

若木太一先生より、長崎聖堂文庫の享保元年の「向井元伐日記」、文政天保年間の「向井閑齋日乗」の翻刻と併せて若木先生の「長崎聖堂略史」、藪田貫先生の「聖堂と学校」；吉川潤先生の「聖堂と奉行」、其の他の論考が収録されている関西大学出版部発行の『長崎聖堂祭酒日記』を戴いた。長崎聖堂関係の資料により同大学の故大庭脩教授の「聖堂文書研究」に次ぐ名著であった。そして長崎の文化を大いに紹介して戴き感謝申し上げます。(定価四、〇〇〇円)

○現在の「長崎くんち」を確実に書き尽くされているのが先月土肥原弘久氏が発刊された『長崎くんちについて』である。非売品の由、市立図書館にも寄贈されているのでお読み下さいとの事。

### 長崎百話 (其の一)

越中 哲也

### 三、

寛永平塞録 この本の原著は「明和七年(一七六七)細川藩の文学者・池辺蘭陵によって刊行された。」と、翻刻者の福田八郎先生は、あとがきで述べられている。異本も多いとのこと。なお、福田先生は名倉氏筆写の天保十五年(一八四四)本を底本にしておられる。翻刻本の奥付には、二〇〇三年十二月十二日発行、印刷所(旧南高来郡加津佐町)シロカワ印刷とある。

島原の歴史・藩制編 島原市役所が編纂し、昭和四七年(一九七二)刊行、印刷は島原新聞社。もう一分冊に自治制編がある。

(純心大学長崎学友の会 会員)

七月といえば二十三日の夜より二十四日にかけて飯香浦の地蔵盆がある。この日は御佛前に飾りソーマンが供えられる。昔この地は茂木村と共に島原有馬氏が支配していたので、有馬氏がキリシタンより佛教に転じた頃、長崎大音寺(浄土宗)の開山伝誉上人の布教によって此の地に御地蔵様が祀られたという。それは寛永十年(一六三三)であつたと記してある。

そしてこの村には二つの地蔵堂が日吉の丘の上にある。上は太田尾地区の人々が、下の地蔵堂は浦地区の人々が祀っておられる。盆の供物にソーマンがあげられるのは京都に始まっているが、ここの供物のソーマンは、出だてのまだ乾燥していない生乾き(なまかわ)のものを、二十三日の朝早くより、部屋戸を締切つて風を断ち、大きなソーマン飾りの組み物がつくられる。そして其の日の夕方、出来あがつた大きなソーマン飾りを村の若い人達が担いで、双盤の音に合せ提灯を先達(なげ)に日吉の丘の地蔵堂に登つてゆく。私は之の風がすきなのです。

地蔵堂では初夜、中夜、後夜と夜の明けるまで鉦の音に合わせた百万遍の念佛の音が聞こえてくる。数年前、私は飯香浦の故峰末雄先生より「この最後の送り鉦・ドゥイ・ドイの鉦の調子が長崎の精霊流しの鉦の音になったのでしょうか」と教えて戴いたことがある。

そして私達は其の翌二十四日、皆様とご一緒にお供えのソーマンや飯香浦名物の「ふくれ饅頭・人形薯」をおいしく戴いた思い出がある。今、この「地蔵盆の行事」は長崎市無形民俗文化財に指定されているそうである。

